

伊豆国の伊東氏と日向入国

郷土史家

末永 和孝

目次

一 伊東氏の祖

二 伊豆に入国と家督争い

三 頼朝の御家人となった祐経

四 祐経の九州出兵

五 伊東支族の日向国下向

一 伊東氏の祖

中臣鎌子（鎌足）は、中大兄皇子（天智天皇）らと大化改新の計画に参画し、律令体制の基礎を築いた。鎌足が臨終のとき、天智天皇より藤原朝臣の姓を賜り、藤原氏の祖となった。鎌足の子、不比等には、武智麻呂、房前、宇合、麻呂の四人の子息がいて、それぞれ南家、北家、武家、京家を名乗り、藤原四家と呼ばれた。奈良時代には武智麻呂の南家が全盛であったが、七六四年、武智麻呂の子、仲麻呂（惠美押勝）が称徳天皇の寵愛を受けていた道鏡を除こうとして失敗し斬罪に処せられると、南家の勢いは衰えた。伊東家は仲麻呂の弟、乙麻呂の流れを汲む家であった。

平安時代になると、北家が藤原氏の主流となった。北家は、天皇の外戚として勢力を伸ばし、八六六年には良房が摂政となり、八八〇年に基経が関白になると、外戚と摂関の地位を独占し、摂関政治を展開した。おもだった官職は北家が独占し、主流から外れた南家など三家は、他の貴族と同様の扱いを受けた。

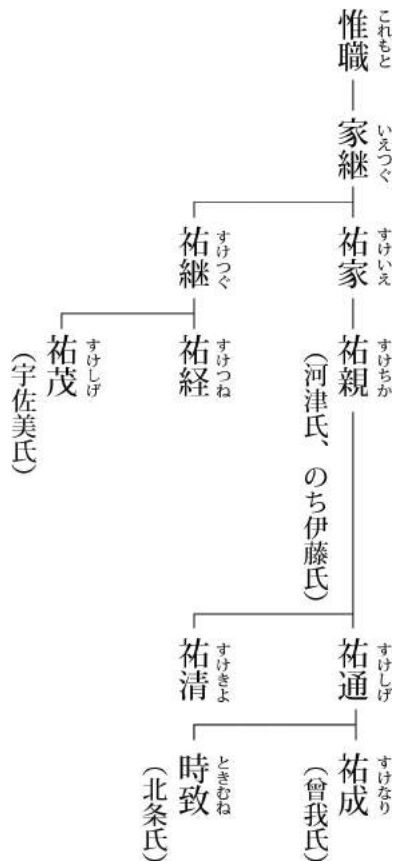
中央で優遇されない貴族は、受領（現地で国司として実務を行う）として現地に赴き、税徴収権を利用して巨額の富を築いて帰国した。「今昔物語」には、日向守が在職中の不正を隠蔽するために、書記に關係書類を改ざんさせ、作業が終わった後、その書記を殺させたという話がでてゐる。これは受領の不正を物語る事例であろう。そのため、成功や重任といった売官によって国司の職を得る者もでてきた。さらに、地方の官職についた貴族のなかには、任期が来ても帰郷せず、土着の武士団の棟梁になる者もいた。

藤原南家の為憲（鎌足から一代）は、九四〇年の平将門の追討に功をあげ、「従五位下、木工助藤原氏」となった。木工助とは木工寮の次官の役職であった。このときから、木工助の工と藤原氏

の藤をとって工藤氏を名乗ることになった。

二 伊豆に入国と家督争い

為憲のあと、一六代惟職は、伊豆国の押領使に任命され、伊豆半島の伊藤庄に移住した。押領使は、本来、大宝律令にはない官職で、在地の土豪を任命していた。しかし、瀬戸内海の内海賊の棟梁であった藤原純友の乱前後から常遣の官職となった。その任務は国内の兇徒鎮圧であった。伊豆国に移住した惟職は伊藤氏を名乗り、伊東氏の初代となった。



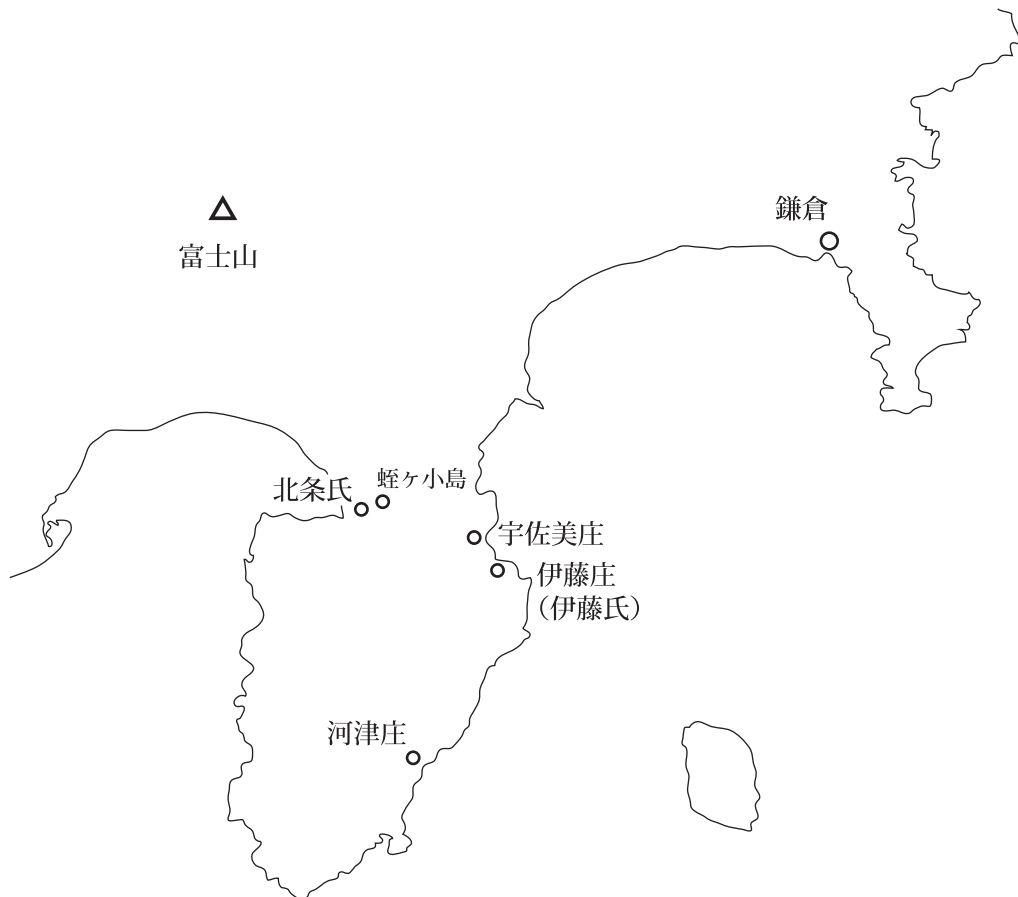
家継の時代には、宇佐美、河津、伊藤の三庄を領し、伊藤氏の本領となった。家継は、祐家が早死していたので、家督を祐継にゆずった。しかし、祐家の子、祐親はこの処置に不満をいだいていた。そのため、祐継と祐親は不仲であった。

祐継は一一六〇年に死去した。祐継は、死後の家督を祐経に譲るつもりであったが、当時、祐経は九歳であったため、祐親を祐経が成人するまでの後見人と定め、後事を託した。

祐親は、祐経が一五歳になると、娘を祐経に娶らせ、京都の平重盛にあずけた。平重盛は莊園の本所の立場にあった。祐経は、重盛を烏帽子親として元服し、その後、武者所の主席となり、一臈いちろうとよばれるようになった。さらに、当時の平家の公達と同様、歌舞音曲をはじめとして、京のみやびを身につけていった。

一一七六年（祐経二五歳）ごろ、母から書簡が届き、祐親が後見となつたいきさつや、祐経が成人すれば家督を継がせるという約束をしていたことを文書等で知り、家督相続の訴訟を起こした。祐経は、当初、これまでの働きや朝廷内の知名度から、訴訟はかならず勝利すると確信していた。しかし、当時、伊豆国における状況は祐経が伊豆国にいたときは大きく変化していた。一一五九年の平治の乱によって敗北した源義朝よしみちの一子、源頼朝よりともが、翌年、伊豆国の蛭ヶ小島ひづりがこじま（静岡県伊豆の国市四日市）に配流となり、その監視役として北条時政ときまさと伊藤祐親があたっていた。祐親は平家や朝廷にとって重要な役割をになつていたことになる。そのため、祐経は訴訟で期待していた有利な判決がえられず、伊豆国に帰って武力に訴えることを決意した。

ほどなく、祐経の郎等らうどうは、祐親の子、祐通を狩場で射殺した。祐通には祐成と時致という二人の男児がいたが、兄弟は成人した後、一一九三年に富士の裾野の狩場で祐経を討ち、親の仇討ちをはたすことになる。



三 頼朝の御家人となった祐経

伊豆国の蛭ヶ小島に配流された源頼朝は、監視役の北条家と伊藤家を行き来していた。一一六七年ごろ、伊藤家に滞在していた頼朝は、伊藤祐親が在京中に、祐親の娘との間に一子をもうけた。帰郷してこれを知った祐親は、平家をはばかり、子供を殺し、娘を他家に嫁入りさせた。さらに、頼朝も襲撃しようとしたが、このことを祐親の子、祐清が頼朝に知らせたので、頼朝は北条館に逃げ込み難を逃れた。その後、一一七七年、頼朝は北条時政の娘、政子と婚姻を結んだ。

頼朝は、一一八〇年、以仁王の令旨に応じ、北条時政ら関東武者の支援をうけて挙兵した。挙兵後の石橋山の戦いでは、頼朝は三〇〇余騎を率いて陣をはった。一方、平家方は平家被官の者など三〇〇〇余騎であった。頼朝の兵が少ないのは三浦氏などの兵が遅れたためであった。

石橋山の戦いするとき、伊藤一族は敵味方となって戦った。祐親は、平家方として、兵三〇〇余騎を率いて参戦した。一方、頼朝方には、祐経の叔父の工藤介茂光や、その子の五郎親光、さらに祐経の弟、宇佐美三郎祐茂らが参戦していた。当時、伊藤家は家督相続でもめていたため、その影響がでたのであろう。この年、祐親は伊豆沖で廻船中に捕虜となり、三浦氏に預けられたが、二年後に死亡した。ここに、祐経と本家の相続で争っていた伊藤祐親一族は滅亡した。

祐経はいつから頼朝の御家人となったのであろうか。

工藤祐経の名がはじめて「吾妻鏡」にみえるのは、一一八四年四月二〇日の記事である。祐親が死んで二年後のことである。祐親の死については、処刑と自殺の二説がある。「吾妻鏡」には、政子の懐妊により、恩赦として助命しようとしたが、御家人たちに恥をさら

すのは無念として自害したと記している。自害の知らせを受けた頼朝は、自分を救ってくれた祐親の子、祐清を御家人にしようとするが、祐清はこれを断り誅殺されている。これが事実であれば、頼朝には伊藤家を潰すつもりはなかったと思われる、工藤祐経が御家人として頼朝に臣従するのは、祐親が自害した一一八二年後であろうと考えられる。これについては、頼朝の挙兵のときから臣従していた工藤茂光や宇佐美祐茂の助言があったに違いない。

頼朝は一四歳までは京都で生活していたので、公家の文化や京のみやびについては肌で感じていたであろうから、配流になってからは関東武者の生活に殺伐さを覚え、幕府を鎌倉に開くにあたっては、京の文化に対抗できる武家の文化の創造をめざしたと思われる。そのため、側近には京の文化を身につけた者を重用した。京都の公家ともつながりを持ち、京のみやびを身につけた工藤祐経は、頼朝にとって願ってもない存在であった。

一一八四年の記事は、一の谷の戦いに敗れ、須磨の浦で捕らえられ鎌倉に送られてきた平重衡をなぐさめるため、頼朝は「藤判官代邦通、工藤一臈祐経、女官一人」を遣わした。祐経は鼓を打ち、今様を歌った。頼朝が邦通に酒宴の様子を聞くと、邦通は「羽林(重衡)は、言語といい、芸能といい、大変優美であった」と答えた。これを聞いた頼朝は、「世上をはばかって同席しなかったが、残念なことをした」といったという。この時期の頼朝の心情を伺い知ることができる。

四 祐経の九州出兵

祐経が武将として名をあげたのは、一一八五年に西海の平家追討に出兵した源範頼の軍に加わったときであった。行軍は兵糧不足や

船の調達などができずに苦しみ、鎌倉に帰ろうという武将すらでてきた。しかし、豊後国の白杵二郎惟隆や、その弟、緒方三郎惟栄の援けにより、豊後国に渡り佐伯に本宮を置いた。白杵氏や緒方氏は豊後国の南部に勢力をはる在地領主で宇佐八幡宮の神官である大神氏系の武将であった。

当時、宇佐八幡宮の権勢は強大で、豊前国、豊後国、日向国に神領の荘園を有していた。日向国では、「日向国凶田帳」によれば、宇佐宮領は一九一三町で、神領は日向国の北部から中部にかけて分布していた。宇佐八幡宮の有力な神官は、宇佐氏と大神氏であったが、当時の大宮司は宇佐氏で、平家方であった。一一八三年、木曾義仲に攻められた平氏は、西国で再起をはかるうとして北九州に上陸したが、反宇佐勢力の緒方惟栄らに攻められて大敗し、宇佐八幡宮の勢力をたよって宇佐大宮司の館に入った。しかし、これも安住の地とはならず、都へ向かって船を出した。

宇佐八幡宮は、源頼頼が佐伯に本陣をおいて平家追討の命を出すまでは、宇佐氏の意向に従い平家方であった。源氏は九州における宇佐八幡宮の権勢を無視できなかったであろうし、九州各国の神領を拠点に平家追討を行うことが効率的であると考えたにちがいない。一一八五年、宇佐氏が平家方であったことを許し、神領を安堵した。これにより、佐伯には九州各地の武者が集まり、名実ともに九州における平家追討の拠点となった。日向国の土持氏も佐伯に馳せ参じ、祐経とも面識をもったと考えられる。

源頼朝は、平家追討の範頼軍が兵糧不足等で苦戦したことに対して、従軍のおもだった一二名の武將に丁寧な書簡を送り、その労をねぎらったが、そのなかに、工藤一臈祐経、宇佐美三郎祐茂の名があり、末尾には「おのおの西海に在って大功をおさめた故である」と記している。こうして祐経は、文武を兼ね備えた武將として、頼朝の側近としての地位をかためた。一一八六年、頼朝が鎌倉へ送ら

れてきた静に鶴岳宮で舞曲を要求したとき、祐経は頼朝の命で鼓を打っている。「吾妻鏡」には、祐経が鼓の役を命じられた理由として、「祐経は）数代の勇士の家に生まれ、楯戟の塵を継ぐといえども、一臈として朝廷のつとめをへて歌舞音曲を見に付けたからである」と記し、文武に秀でた武將であるという評価をされている。祐経は將軍の許しを得て、「東」の文字をつかい「伊東大和守」を称していた。

五 伊東支族の日向国下向

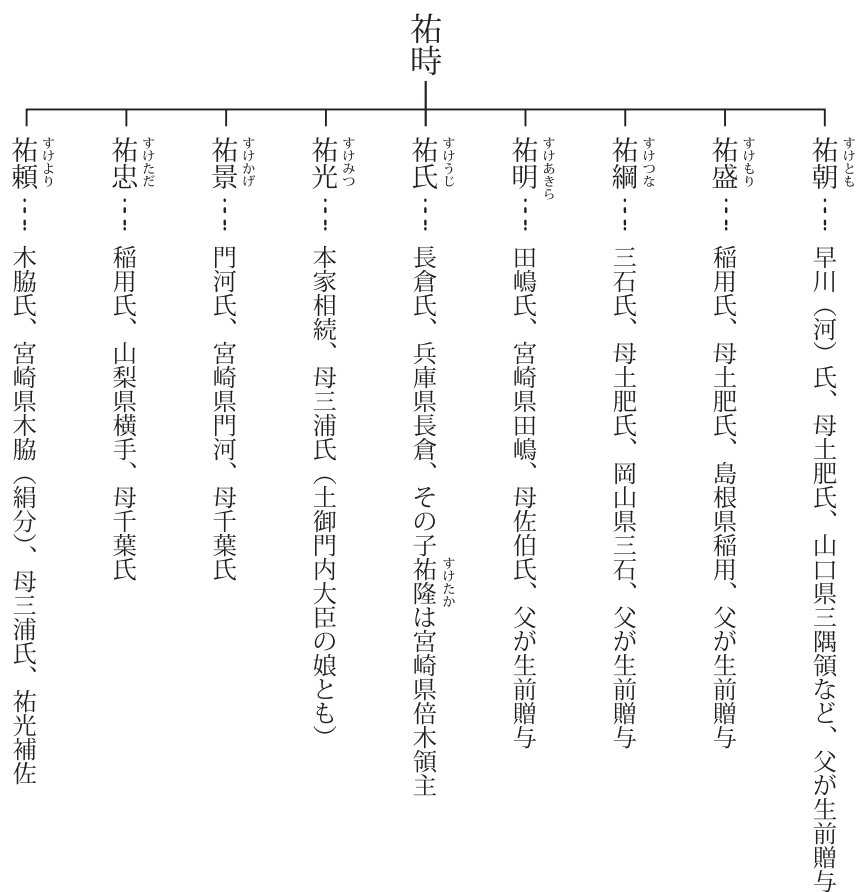
祐経は幕府内で確固たる地位を固めていったが、一一九三年、富士の狩場で曾我兄弟によって討たれた。頼朝が祐経の死をどれほど悼んでいたかは、翌年の「吾妻鏡」の記事からも伺い知ることができる。これは、若宮別当坊に京都から別当法眼がやってきたときの話である。頼朝は法眼が舞曲に堪能であることを知り、その芸を見ようと別当坊にやってきた。宴もたけなわになったころ、頼朝は「故祐経が今に存命であれば、定めて楽しみも増したであろうに」と仰せられ、しきりに落涙のご様子であったという。

祐経が落命したとき、家督をつぐ伊東祐時は一〇歳であった。祐時は頼朝にかわいがられ、頼朝を烏帽子親として元服した。さらに、頼朝の命により、祐時の母の実家である千葉家から月星・九曜の家紋を譲り受けた。

祐経は、頼朝が逝去する前年、一一九八年、一五歳のとき、日向国地頭職を拝命した。その後、將軍実朝の随兵として、將軍が鶴岳八幡宮に参詣のとき供奉人になるなど、將軍の側近として活躍した。また、実朝の後、將軍となった九条頼経が鎌倉に下向するときには供奉人となったり、一二二一年の承久の乱のときには、隠岐に流罪

になった後鳥羽上皇の身柄を受け取ったり、首謀者を斬るなどの活躍をした。

伊東祐時は、一二五二年に死去した。このとき、僧侶などになった者は除いて九人の男子がいた。



祐時の跡を継ぎ伊東家を相続したのは伊東祐光であった。さらに、祐光を補佐したのは祐頼であった。祐光と祐頼の母親は、三浦氏の娘であり、土御門内大臣の娘であったとも言われている。この家督相続は將軍の命によって決まった。祐朝が相続しなかった理由は母親にあった。母は土肥氏の娘とあるが、土肥氏と伊東氏は微妙な関係にあった。祐時の父、祐経が祐親の娘を娶り、夫婦ともども京都の平重盛の館に近づけられたが、祐経と祐親が家督相続を争うことになる。祐親は娘を祐経から引き離し、土肥氏に嫁がせた。こうした事情をはばかったためといわれている。

日向に下向したのは、祐明、祐景、祐頼であったが、このうち祐頼は祐光の補佐役であったため、鎌倉に在住した。

ここでは、祐明の日向下向についてみてみよう。

祐明は三人の兄と同様、祐時から田嶋庄を生前贈与されていた。祐明がいつ田嶋庄に下向したかは定かではないが、弟達が家督を継ぎ、その補佐役になることが明らかになった時点で鎌倉を出たと思われる。しかし、当時の田嶋庄は土持氏支配の莊園に取り囲まれていて身動きできない状況にあり、土持氏と友好関係をつくらなければ存続できない環境にあった。

土持氏は宇佐八幡宮と深い関係にあった。その「由緒」によれば、宇佐八幡宮は、五七〇年、豊後国宇佐郡に建立されたが、その時の勅使、直亥宿禰は宮地のくずれをとめる工事に功があり、土持の姓と共に日向国の県を賜ったという。さらに、七一九年には、日向国大隅の反乱を鎮圧するために、宇佐八幡宮を中心に神兵が編成され日向国に攻め下ったが、そのなかに、緒方氏、佐伯氏らと共に土持氏も参戦し、その功により、県、財部、諸県等を賜ったという。その後、八五九年に三河へ移るが、一二五七年には日向国県に移住し、しだいに勢力を伸張していったといわれている。

祐明にとって幸いであったのは、祖父の祐経が九州の平家征討に

島津荘寄郡

- | | | | |
|---|-----|------|----------|
| 1 | 新納院 | 120町 | 地頭掃部頭 |
| 2 | 宮頸 | 30町 | 地頭右兵衛尉忠久 |

宇佐宮領

- | | | | |
|---|--------|------|---------------|
| 3 | 田嶋荘 | 90町 | 地頭故勲藤原左衛門尉 |
| 4 | 広原荘 | 100町 | 弁済使七郎助綱 |
| 5 | 新名爪荘別府 | 80町 | 弁済使土持太郎宣綱 |
| 6 | 宮崎荘 | 300町 | 地頭前掃部頭 |
| 7 | 瓜生野別府 | 100町 | 弁済使貞吉 |
| 8 | 諸泉荘 | 450町 | 地頭故勲藤原左衛門大尉 |
| 9 | 浮田荘 | 300町 | 弁済使故宇佐大宮司公通宿禰 |

八条女院領国富荘

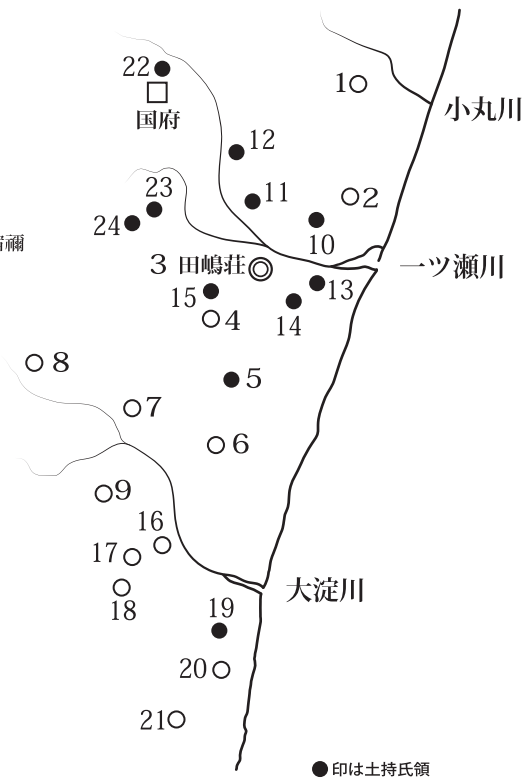
- | | | | |
|----|------|------|----------|
| 10 | 下富田 | 130町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 11 | 新田 | 80町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 12 | 佐土原 | 15町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 13 | 田島破 | 40町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 14 | 袋 | 15町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 15 | 那珂 | 200町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 16 | 左右恒久 | 100町 | 地頭平五 |
| 17 | 太田 | 100町 | 地頭平五 |
| 18 | 加納 | 200町 | 地頭平五 |
| 19 | 国富本郷 | 240町 | 土持太郎宣綱 |
| 20 | 隈野 | 80町 | 地頭平五 |
| 21 | 加江田 | 80町 | 地頭平五 |

国富荘寄郡

- | | | | |
|----|------|-----|----------|
| 22 | 穂北郷 | 70町 | 地頭土持太郎宣綱 |
| 23 | 鹿野田郷 | 50町 | 地頭土持太郎宣綱 |

前済院領

- | | | | |
|----|-----|------|----------|
| 24 | 都於郡 | 150町 | 地頭土持太郎宣綱 |
|----|-----|------|----------|



従軍したとき、宇佐八幡宮の神官、大神氏系の緒方氏や佐伯氏の案内で佐伯に本陣を構え、ここから九州の武將に指示をだしたことや、これまで平家のために祈禱していた宇佐八幡宮を許したことなどにより、征討軍の有力武將であった祐経の名は日向国にも知られていたと思われるし、親交のあった緒方氏や佐伯氏を通じて祐経と土持氏も面識があったとも考えられる。祐明にとって最も心強かったのは、母親が佐伯氏の娘であったことである。

こうした状況のなかで、伊東祐明は日向国の有力武將であった土持氏との摩擦もなく田嶋庄に下向し、伊東氏の支族として日向国に根を下ろすことになった。

伊東氏の本家が日向国に下向するのは南北時代にはいつてからである。